

2020. 12. 6 (日) 創世記22:1~18

22:1 これらの出来事の後、神がアブラハムを試練にあわせられた。神が彼に「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は「はい、ここにおります」と答えた。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」

22:3 翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、二人の若い者と一緒に息子イサクを連れて行った。アブラハムは全焼のささげ物のための薪を割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ向かって行った。

22:4 三日目に、アブラハムが目を上げると、遠くの方にその場所が見えた。

22:5 それで、アブラハムは若い者たちに、「おまえたちは、ろばと一緒に、ここに残っていなさい。私と息子はあそこに行き、礼拝をして、おまえたちのところに戻って来る」と言った。

22:6 アブラハムは全焼のささげ物のための薪を取り、それを息子イサクに背負わせ、火と刃物を手に取った。二人は一緒に進んで行った。

22:7 イサクは父アブラハムに話しかけて言った。「お父さん。」彼は「何だ。わが子よ」と答えた。イサクは尋ねた。「火と薪はありますが、全焼のささげ物にする羊は、どこにいるのですか。」

22:8 アブラハムは答えた。「わが子よ、神ご自身が、全焼のささげ物の羊を備えてくださるのだ。」こうして二人は一緒に進んで行った。

22:9 神がアブラハムにお告げになった場所に彼らが着いたとき、アブラハムは、そこに祭壇を築いて薪を並べた。そして息子イサクを縛り、彼を祭壇の上の薪の上に載せた。

22:10 アブラハムは手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。

22:11 そのとき、主の使いが天から彼に呼びかけられた。「アブラハム、アブラハム。」彼は答えた。「はい、ここにおります。」

22:12 御使いは言われた。「その子に手を下してはならない。その子に何もしてはならない。今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく分かった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった。」

22:13 アブラハムが目を上げて見ると、見よ、一匹の雄羊が角を藪に引っかけていた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の息子の代わりに、全焼のささげ物として献げた。

22:14 アブラハムは、その場所の名をアドナイ・イルエと呼んだ。今日も、「主の山には備えがある」と言われている。

22:15 主の使いは再び天からアブラハムを呼んで、

22:16 こう言われた。「わたしは自分にかけて誓う——主のことば——。あなたがこれを行い、自分の子、自分のひとり子を惜しまなかったので、

22:17 確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。

22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。」

〔説教〕

朗読された聖書、創世記 22 章に記されている事は、アブラハムによるイサク奉獻というあまりにも有名な出来事です。

ここには人となってこの地上に来られた御子イエス・キリストと、そのイエス・キリストをお遣わしになって私たちに与えてくださった父なる神についての雛型（ひながた）・型（かた）—実物・本体をかたどった模型—が示されています。

言葉を変えて言えば、キリストについての預言・予告です。

神のひとり子イエス・キリストの模型がイサクであり、父なる神の模型がアブラハムということになります。

アドヴェントのこの時、今日はそのことを覚えたいと願います。

前に、アブラハムがいと高き神の祭司メルキゼデクにすべての物の十分の一を与えたことを前に見ました（14 章）。

アブラハムを守り助け、王たちとの戦いに勝利させてくださった主なる神への感謝と喜びをもってアブラハムは神から与えられたすべての物の十分の一を神に献げたのでした。

それは、神の直接の言葉による命令によってではなく、アブラハムが自発的に献げた物でした（もちろんそこには密かな聖霊の働きがあったことは確かでしょう）。

しかし、今度は「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」（22:2）との神からの直接のはっきりとした言葉による命令でした。

アブラハム 100 歳、正式の妻であるサラ 90 歳になって、やっと、神の力により、恵みによって与えられた子がイサクでした。

そのイサクにあってアブラハムの子孫が起こされる（21:12）、イサクだけでなく彼の後の子孫とも契約を立てる（17:19）と神は約束してくださっていました。

もちろん、一人の父親としてもアブラハムにとってひとり子イサクは自分にとっての最高、最上、一番大事なもの（者）、自分が愛している宝でした。

そんなイサクのためなら自分の命だって全然惜しくなかったでしょう。

「あなたの子、あなたが愛しているひとり子」（2）と神ご自身もわざわざ仰っているイサクを「全焼のいけにえ」として焼き尽くして神に献げよとの神の命令でした。

アブラハムが自分の子、自分の愛するひとり子を文字通り丸ごと完全に神に献げるか否か、即ち神を信じ、神の約束を信じ、神を恐れ、神の声に聞き従うかという“信仰による従順”の「**試練**」（1）でした。

そして書かれているように、アブラハムは神の「**試練**」に“合格”しました。

神の約束が、真実が、愛が、恵みが、あわれみが、義が全く信じられなくなるような、そして不満と呪いをぶちまけ、自暴自棄になってもおかしくないような「**試練**」、危機を信仰によって、信仰の従順によって乗り越えたのでした（もちろんそれも全く神の恵みによることでした）。

「今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく分かった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった。」（12）

「あなたがこれを行い、自分の子、自分のひとり子を惜しまなかった」（16）

「あなたが、わたしの声に聞き従った」（18）

このように神はアブラハムに仰ってくださいました。

このときのアブラハムの信仰について、ヘブル書の記者がはっきりと教えてくれていません。

「信仰によって、アブラハムは試みを受けたときにイサクを献げました。約束を受けていた彼が、自分のただひとりの子を献げようとしたのです。神はアブラハムに『イサクにあって、あなたの子孫が起こされる』と言われましたが、彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできると考えました。それで彼は、比喩的に言えば、イサクを死者の中から取り戻したのです。」(ヘブル 11:17-19)

なんと神はアブラハムに復活の信仰までも与えてくださったのでした。

それでアブラハムは徹底的に、徹頭徹尾、100 %神を信じ、神の約束を信じ、神の命令に「聞き従った」(18)のです。

それ故、もはや「すべての物の十分の一」どころではありませんでした。

アブラハムは自分のすべて、自分自身と言ってよいほどの「自分の子、自分のひとり子」を惜しまないで神に与え、お献げしたのです。

それ故、「あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。」(18)と最終的に神は約束してくださいました。

この「あなたの子孫」とは直接的にはイサクのことですが、新約の初代教会は、何と言ってもアブラハムの子孫として地上にお生まれになった唯一の救い主、イエス・キリストを指して言われたのだと解釈しました。

「約束は、アブラハムとその子孫に告げられました。神は、『子孫たちに』と言って多数を指すことなく、一人を指して『あなたの子孫に』と言っておられます。それはキリストのことです。」(ガラテヤ 3:16)と使徒パウロは言いました。

マタイも「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリスト」(マタイ 1:1)と言いました。

このように全く神を信じ、神の命令に「聞き従った」アブラハムから出る唯一人の「子孫」、「地のすべての国々」の「祝福」の源である人とは、根本的究極的には、父なる神のみこころに従って「アブラハムの子孫」としてこの地上に来られる御子イエス・キリストをおいて他にはあり得ません。

このように、神に完全に献げられ、「死者の中から取り戻」された「アブラハムの子孫」イサクとは、父なる神のみこころに従って私たちの罪を負われて十字架でご自身を神にお献げになり、神によって復活させられたお方、イエス・キリストの型でありました。

そしてこの聖書箇所に戻り繰り返されて響いている言葉、「あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった」(12)、「あなたがこれを行い、自分の子、自分のひとり子を惜しまなかった」(16)に目を留めないわけにはいきません。

「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサク」(2)ともありました。

この、アブラハムが自分の愛するひとり子イサクを神に献げた(与えた)ことは、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。」(ヨハネ 3:16a)ことの雛型なのでした。

父なる神は、愛するご自分の子、ひとり子イエス・キリストを惜しまずにこの罪の世にお遣わしになり、罪人である私たちに与えてくださいました。

使徒パウロは、父なる神が「私たちすべてのために、**ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された**」(ローマ 8:32)とっています。

御子「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」(ピリピ 2:6-8)

使徒ヨハネは、「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」(Iヨハネ 4:10)とも言うのです。

このように、父アブラハムがその愛するひとり子イサクを神に献げたことは、天の父なる神がその愛するひとり子の神イエス・キリストを惜しむことなく十字架の死に渡され、御子イエスもまた御父に完全に従って罪無きご自分を十字架で御父にお献げになり、そうやって私たち罪有る人間を救い、贖いを成し遂げなされることの予告、預言だったのです。

「私たちすべてのために、**ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された**」神が「御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださる」(ローマ 8:32)のです。

その約束の恵み(それは何よりもまずイエス・キリストご自身ですが)のすべてを神から与えられているのですから、私たちは御父と御子に、そしてみことばと共に働かれて神のすべての恵みを知らせ悟らせてくださる聖霊に、即ち三位一体の神に讃美を喜びを感謝を献げるのです。

そしてアブラハムのように、神に全く信頼し、神の命令に聞き従い、十分の一どころではなく、それ以上即ち自分自身を、自分の一番大事なものを神に献げて歩むのです。

そしてやがて「二度目には、罪を負うためではなく、ご自分を待ち望んでいる人々の救いのために現れて」(ヘブル 9:28)くださる主イエス・キリストにまみえるのです。